
暗闇の支配者

テト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇の支配者

【Nコード】

N7750Z

【作者名】

テト

【あらすじ】

グリモアという生き物により夜を支配された世界、人間の行動範囲は限られ、夜にガーデンの勢力区域の外に出ることはできない、出れるのは唯一検地夜英団という対グリモアの戦闘部隊のみ…
主人公ルエラ・ビエストは傭兵育成学校を卒業後検地夜英団へと入団し、グリモアとの戦いを選んだ、仲間と共にグリモア討伐へと向かう！人類の生きる道は！？ルエラと仲間の運命は！？

悪夢の始まり

それは静かな夜だった

いや、静かな夜のはずだった

「う、うわあ〜」

「きゃ〜〜!!」

グチャ!!

グチヨ!!

目の前で人間がいとも簡単に殺されていて
月夜の晩に鈍い音と叫び声だけが響く、

「助けてくれ!」

ドス!!

助けを求めたつて無駄だ、新米の俺たちが自分以外のやつのことなんてかまっつてられるわけがない、

「みんな散れ!!」

百戦錬磨の隊長ですら手におえず退去命令をだした

「一人でも多く生きのびろ!!」

それが隊長の最後の言葉、俺たちのためにおとりとして闇に消えた、それでも俺たちが逃げるには足りず、多くの仲間が犠牲になっていく

はあ、はあ、
仲間の屍を飛び越えて
命かながら木陰に身を隠した

「レイン、レイン！！助けてくれ！！」

やめろ！！

俺の名を呼ぶな！！

ブチユ！！

俺のすぐ後ろでまた誰か死んだ、声なんて完全に裏返っていて、誰が叫んだのかなんてわからない

怖かった、恐ろしかったしかし不思議と涙は出てこなかった

人間本当に極限の状況に立たされると涙を流すことも忘れてしまう

すぐ後ろで聞こえる叫び声が苦痛で、

俺はその場から逃げだし数十メートル離れた木陰に身をひそめた

「く、くるな！！」

「ぎあゝゝ！！」

ここでも、声が聞こえる俺は目と耳を閉じた

奴らに手も足もでない

こんなはずじゃあないんだ！

こんなはずじゃ …

目を閉じても仲間が殺され、血の海となっているあの地獄絵図は目に焼き付いて離れなかった

早く終わってくれ、

早く …

…しばらくして音は鳴り止んだ、

何ごともかったように静かな月夜の晩にもどりつつある

「 ……そうか、日の出が近いのか、」

安心した途端足の力がぬけて、その場にくずれた

「 ……ごめんみんな」

やっと涙が溢れた、仲間がたくさん死に、わけがわからぬまま、全滅した、おそらく誰一人奴らを倒せていないだろう、

「俺は誰一人守ることができない、」

…何人生き残っているだろう、もしかしたらこの部隊で生き残ったのは俺一人なのかもしれない

涙は拭いても拭いても流れてきた、

自分の無力よりも、悲しみの中で自分の鼓動を感じる、自分が生きて
いる喜びに涙が出た

それが悔しかった

それでも、それでもガーデンへ戻らなければならない、
みんなの心を持ち帰ることが俺の指名、そうだ、ここで俺が帰らな
ければみんなはただの無駄死になっちゃってしまうんだ、
流れる涙を押し殺し、自分自身に言い聞かせた、

「…みんなで帰ろう」

決意を固め

一歩を踏み出し、顔を上げた俺は ……

「…あ…ああ
」

………

⋮

奴らと目が合った

⋮

⋮

卒業

まだ肌寒い季節ではあるが、今日は太陽が眩しく、風も穏やかなのでここ数日では一番暖かい日だ、学校のライン広場には同じ制服を着た若者がきれいな列を整えて並んでいた

「…以上533名を36年度傭兵育成学校の卒業生とする!」

ザッ

その場に並ぶ533名全員が一斉に左足を右足につけて、右手を胸に当てた

「解散!」

司会者の号令で、

前から準に列をつくり広間を後にする

回りから見るとまるで軍隊の行進のようだ、確かに傭兵を育成する学校だから軍隊で間違いではないが、まあ、伝統のようなので仕方がない

「おい、ルエラ」

卒業の式が終わり、一息ついていると後ろから声を掛けられた

「おつかれセジア」

すでに重々しい雰囲気はなく、各々仲のいいやつと集まりだしている、セジアとは小さいころからの親友で、こいつのことなら何でも知っていると言っただけで仲がいい。

「やっとこの学校ともおわかれだな」

「そうだな」

セジアは満面の笑みで話してくる、無理もない、この学校は一言で表すなら鬼だ、信じられないほど身体を鍛えさせられ、勉強も信じられないほどムズい、それゆえ卒業しないで中退するものが全体の3割にもものぼる、体力に自信があった俺ですら何回くじけそうになったことか、セジアは残念ながら体力に乏しい、しかし勉強を頑張ったためギリギリ単位がとることができたのだ
俺たちが卒業の喜びを分かち合っていると、向こうから女子が2人歩いてきた

「喜びすぎだよセージア、」

「シヤナも喜んでたくせにー」

この2人はシヤナとブロー、女子の中ではけっこう仲のいい2人、なんなんだかんだいって気が合うんだよな、いるだろ？絡みやすい女

子って、

先ほどシヤナに茶々を入れていたブローだが、なんだか言っても嬉しいようでいつもニコニコしている

「ブロー・シベリオちよつといいか？」

「え、あ、はい、今行きますー。ごめん、ちよつと行ってくるねー」

どうやら教官に呼ばれたようだ、ブローはしゃべり方が独特でごくマイペースなやつだが、成績はとても優秀、年に3度ある定期テストでもたびたび一位を取っていた、まあ、体力だけみれば俺の上だが……

……体力だけ……（泣）

俺たち3人は教官について行くブローを見送ったあと、それぞれ顔を見合わせた

「すごいなブロー、

多分あれも成績なんちゃらで呼ばれんだろ？」

「うん、そうだと思うよ」

ブローと一番仲のいいシヤナは自慢げな顔をしている

「シヤナも本気でやればもうちよつと上に行けんじゃねーの？」

セジアの言葉にカチンときたのか、ちよつと嫌な顔をした

シヤナは基本めんどくさがり屋なため、あまり本気を出さない、そのため成績は中間あたりの安全地帯をいつもキープしていた、俺か

ら言わせればそれだけでけっこうすごいんだが……

「それよりこれからどーすんの？」

ちよつとセジアを避けて、シャナは俺のほうを向いて話してきた

「これからって？」

「進路！」

ああ、そうか、と俺は頷いく

傭兵育成学校の出だと言えば普通の店は嫌な顔はしないだろう、むしろ優遇されるぐらいである、しかし、それだここで培った知力は役にたつが体力、武術、技術は、まったく使うところがない、

「…やっぱりガーデンかな？」

「なに、結局ガーデンにしたの？」

卒業の式前はどこかの店で雇ってもらおうと思っていた、しかし、どこの店？と聞かれても特にどこという願望がなく、あても無かった、それに加えせっかくこの傭兵育成学校で心も身体も鍛えたのだからそれを生かせるどころ、つまりガーデンに入団するという結論に至った、

と言ってもここはガーデンへ入るために作られたような学校のため毎年卒業生の8割程度がガーデンに進む

「まあ、ガーデンへ入って、守護庭団でのんびりするのが妥当かなって」

「そつだよね、そつちのがいいよ」

なんだか素っ気ない返事で返された、
なんだよ自分から聞いてきたくせに

「セジアはどこに？」

シヤナはもう機嫌が直ったのかケロっとした顔でセジアに聞いていた
セジアもセジアでシヤナがちょっと不機嫌になっていたことさえ気が
がついていないようだ

「……もちろんガーデンに入って、検地夜英団に入団してやる」

「検地夜英団！？セジアじゃ無理だよ」

「なんとも言えよ」

そういえばセジアは唯一俺に話してくれないことがある、セジアの
母親のことだ、俺もセジアの母さんにはよく面倒を見てもらったも
のだがセジアの母さんは『あの日』に亡くなってしまった、何があ
ったのかは話してくれない、

セジアは検地夜英団に執着するようになった理由もおそらくそのこ
とが原因、間違いなくグリモアが関わっていたらう、しかし、セジ
アはこのことを一人で抱え込んでしまっていて、助けてやりたいと
は思うがセジアの傷をうまく聞き出す方法を俺は知らない、
これが唯一の俺とセジアの心の溝……。

「そういうシヤナはどうすんだよ」

「うーん、私も検地夜英団がいいかな？……………これがいいから

「!!」

そう言つてシャナは右手の人差し指と親指で銭のマークを作つた

「結局自分もじゃん!」

セジアとシャナの会話を隣で聞いている俺は半笑い、…さっき守護庭団のがいいみたいなこと言つてなかつたけ?

検地夜英団というのは守護庭団と共にガーデンの監視下に置かれた部隊である、

そもそもガーデンとは俺たち人類が暮らすこの地域を『グリモア』から守る組織団体だ、守護庭団という団体名の由来も人類が暮らす庭、それを守るという意味で守護庭団となっている、

まあ、俺たちとグリモアはほとんど隔絶されているので守護することも少ないが、

そして検地夜英団は守護庭団とは真逆、俺たちがグリモアの調査のために攻めいる部隊であり少数だ、ゆえにとても優秀な奴でないと入団できない、セジアには悪いがよつぽどの奇跡がないと入ることはできないだろう。実を言うと俺の親父は検地夜英団に入っている…多分すごいことなんだろう。

…：…：そういえば俺が産まれる前から検地夜英団に入ってるって聞いたな、階級もガーデン内で数十人しか持つてない階級を持つてるとか、…：これみんなにはまだ話してないよな?この際だから話しておくか、

しかし、俺が親父の話しようとしたその声はブローによってかき消されてしまった

「たっだいま〜」

「お、ブローおかえり〜」

「おかえり、」

「お、おかえり、」

ちえ、俺の話しを……

「そういえばみんなのこと教官が呼んでたよ」

教官が俺たちを？

案の定みんなの顔を見てみると頭の上にクエッションマークがついている、だってたった今卒業の式を終えた俺たちに話しなんてあるのか？特に怒られるようなこともしてないし

「多分、夜英団の勧誘だと思う。」

夜英団の勧誘！？

ブローの言葉にみんなはますますクエッションマークをだした

「なんで私たちが？」

「わからないけど、なんか、雇用人数を増やしてるみたいなの」

雇用人数を増やしているということは今年は検地夜英団に入団する希望者が少なかったのか？

検地夜英団はガーデンに入り実績を上げることでも入団することができるけど、それでも規定人数にならなかったのか？それともただ単に人数を増やしているだけか…

「とにかく教官が呼んでるから行ってきて」

「お、おう」

「わかった」

俺たち3人 頭にクエッションマークを残しながらしびしび教官の
もとに向かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7750z/>

暗闇の支配者

2012年1月9日00時48分発行